

2013年(平成25年)9月18日

病院長からの一言

— ICU増床竣工式を開催 —



弘前大学医学部
附属病院長 藤 哲



ICU増床竣工式が去る平成25年7月22日に附属病院外来診療棟5階大会議室で開催されました。式では、お忙しい中、三村申吾青森県知事より祝辞(代読：山中朋子青森県健康福祉部医師確保対策監)をいただきました。ご参列いただきました佐藤弘前大学長、中路大学院医学研究科長はじめ関係各位にこの場をお借りして

お礼を申し上げます。遅れは致しましたが、無事この日を迎えることができ安心しております。

さて、今回のICUの8床から16床への増床により、高度救命救急センターが三次救急医療機能を十分果たせるよう後方支援ベッドの役割の一層の強化とともに、術後患者の集中管理を担当し病棟スタッフの負担軽減を図ることが

可能となりました。

総事業費は約10億円で、その約半分を県の補助金より、残りを本学の自己財源から拠出していただきました。スタッフに関しては、医師3名・看護師26名・臨床工学技士1名の増員を法人にお認めいただき、配置した所です。ご配慮いただいた関係各位に深く感謝致します。

本来は、昨年の4月に始まり本年3月中に終了し4月よりOpenの予定でした。しかし、従来のICU機能及び病院の機能をできるだけ維持した状態でしかも手術場の直下での工事ということもあり、いろいろな制約が生じることとなり工期が遅れ、結局8月1日よりの診療開始となりました。しかしながら、ICU業務や繊細な手術が今に始まったわけではないので、『いろいろな制約』というのは企画あるいは設計の段階で十分予想されたわけで、私ども病院

側としては不満が残ったところでした。

今後これを機に、病院機能のさらなる向上をめざし職員の皆様とともに努力します。最後になりま

すが、この紙面をお借りして、今回のICU増床工事にご尽力いただいた各方面の方々に感謝の意を表します。



ICU前でテープカット
 右から、中路大学院医学研究科長、江羅総務担当理事、佐藤弘前大学長、山中青森県健康福祉部医師確保対策監(青森県知事代理)、藤病院長、廣田集中治療部長

各診療科等の紹介

【医療安全推進室】

日頃より、医療安全推進室の運営にご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。

平成11年(1999年)に国内で相次いで発生した衝撃的な医療事故を受けて、わが国の実質的な医療安全活動が始まりました。医療安全推進室はこのような背景で、平成13年6月に院内措置として設置されました。当初は室長(副院長が兼任)と看護師長の専任リスクマネジャー(GRM)1名、医事課職員2名で発足しましたが、平成18年4月に病院長直属の組織として位置づけられ、病院を挙げて強力に医療安全活動を推進していく体制が整いました。現在の専任スタッフは、室長を兼ねる医師 GRM(准教授)と2名の GRM(看護師長、薬剤部主任薬剤師)、および事務職員1名の計4名です。この他に、兼任の医療安全推進室員(医師2名、看護師2名、薬剤師1名、臨床検査技師1名、診療放射線技師1名、臨床工学技士1名、医事課長)のご協力をいただきながら運営されております。

当室の役割は、特定機能病院として患者さんに安全・安心な医療を提供するためのしっかりとした基盤作りとその展開を、皆さんとともに推進していくことであります。具体的な業務として、皆さんから日々報告いただくインシデントレポートの分析により、医療現場に潜むリスクをいち早くとらえて改善策をフィードバックし、医療事故の防止を図っています。毎週の定例会議では、インシデントレポート事例について多職種の医療安全推進室員とともに、多面的



な検討が行われます。レベル3b以上の事例は報告を受け次第、随時検討会を開催して問題点の追究と改善策が検討されます。事故を未然に防ぐためには、安全意識の向上が不可欠であり、研修会や講演会を通じた安全文化の醸成にも努めています。ご存知のように、当院では医療安全関連の委員会として「リスクマネジメント対策委員会」と「事故防止専門委員会」があり、毎月開催されます。医療安全推進室はこれら委員会の運営にあたり、60余名の部署リスクマネジャーで構成される「事故防止専門委員会」からはマニュアルの作成や院内体制の標準化活動等々の強力な支援をいただいております。皆さんとともに当院の医療の質向上に寄与すべく、地道な努力を続けています。

対外的には、国立大学附属病院医療安全管理協議会の一員として、大学間の医療安全に関する情報交換を行うとともに、安全管理体制の外部評価である「相互チェック」に関わっています。ま

た、日本医療機能評価機構の「医療事故収集等事業」と「ヒヤリ・ハット事例収集事業」へのインシデント・アクシデントの登録業務を行っています。地域活動として、近隣の6医療機関と医療安全に関する情報共有と相互支援を目的とした「医療安全地域ネットワーク会議」を設け、事務局としての役割を担っています。

医学科および保健学科の医療安全の卒前教育にも積極的に関わり、BSL学生への医療安全面からの指導も行っています。

医療の技術革新とともに医療プロセスの多様化と複雑化が進んでいる現代医療のキーワードのひとつは「チーム医療」だと思います。チームの高いパフォーマンスは確かなタスクワークとチームワークにより得られるものです。当院の医療安全活動をより実りあるものにしていくためにも、皆さんとのチームワークが必要です。今後ともご支援、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

(医療安全推進室 室長 福井康三)

臨床試験管理センターの設置

平成25年7月1日、旧治験管理センターを母体として、臨床試験管理センターが設置されました。本センターは、1) 質の高い治療を安全かつ迅速に実施すること、2) 医師主導治験及び研究者主導臨床研究が科学的に適正かつ円滑に実施されること、を2大目標に、活動を行っています。

新しい薬や機器は、世の中に出る一歩前の最終テスト(治験)として、ボランティアの患者さんに実際に使用され、その効き目や安全性が厳しく評価されます。治験では、質の高い結果を出すと同時に、患者さんの安全を最大限に確保する必要があります。本センターでは、治験の計画等を十分に検討し、患者さんへの細やかなケア、治験実施者・治験依頼者への迅速・柔軟な対応を常に心がけて活動しています。

大学病院は、「教育」、「診療」そして「研究」をその使命とします。本センターは、世界的に進むエビデンスに基づいた標準医療(EBM)に必要な科学的根拠を確立し、世界に発信すべく、科学的に適正な臨床研究を円滑に実施するための

体制整備を進めています。

臨床研究は、ヒトを対象に観察ないし介入を行い、医療技術の有用性を科学的に評価することを目的とします。質の高い臨床研究とは、適切な計画が企画立案され、倫理指針に準拠して実施され、得られたデータの信頼性が担保された研究である、といえます。しかしながら、多忙な研究者(医師)のみでは質の高い臨床研究の実施は困難であり、臨床研究コーディネーター、データマネジャー、事務等による臨床研究の支援が重要となってきます。

私たちは、「治験・臨床研究を通じ、次世代に優れた医療を残す」ことを目標に、日々活動しています。しかし、臨床試験管理センターはあくまでサポーターであり、その存在価値を発揮するためには、院内の治験・臨床研究実施アクティビティの向上が不可欠と思われます。皆さまの更なるご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

(臨床試験管理センター 副センター長 板垣史郎)



先憂後楽

ICU増床



集中治療部長 廣田和美

集中治療部(ICU)では、主に院内重症患者を集約化し、生命維持装置の駆使や詳細な生命情報モニタリング、濃厚なマンパワーの投入により、きめ細かで高度な患者治療を行っています。当院ICUは1983年4床で開設され、その後は重症患者の増加に呼応する形で拡充し、今年度は16床に増床しました。今回の増床の目的は、高度救命救急センター開設に伴って増加した重症救急患者への更なる対応、ICU管理が望ましい

がICUベッド不足のため入室出来なかった手術患者へ対応、高齢化に伴う重症患者および癌関連手術患者数増加への対応、地域がん診療連携拠点病院として先進医療や難治癌に対する治療への集中治療医学的サポート、そしてこれらの集学的治療を通しての本県全体の医療の質向上への貢献があります。これらを、効率良く実施するために、8床は中・長期集中治療管理を必要とする重症患者を対象としたGeneral ICU、残り8床

は術後集中治療管理を必要とする手術患者を中心としたSurgical ICUに分けて運営することにしました。このことにより、重症患者の治療の充実、術直後の患者管理の安全性の向上、一般病棟の負担軽減と効率化に寄与出来ると考えております。当院ICUは、日本では数少ないClosed ICU、つまり各診療科の主治医制によるOpen ICUではなく、ICU医(麻酔科医)が中心となって治療する体制です。麻酔科にとってはかな

り重い負担ですが、一般的には患者予後は明らかにClosed ICUがOpen ICUに優ることが確認されており、今後とも現システムで対応していきたいと思っています。しかし、本県麻酔科医不足は深刻であり、それを考慮せずに本県の医療の質向上を考えただけの増床は無謀であったかもしれません。今後皆様の御協力なくしては、立ち行かなくなる事があるかもしれません。どうか御協力の程宜しくお願い申し上げます。

「外科手術体験セミナー in 弘前」を終えて



6月29日、医学部コミュニケーションセンターにおいて「外科手術体験セミナー in 弘前」を開催しました。このセミナーは私たち医療従事者自身が病院から外に出て現地で子供たちと触れ合うことにこだわり、2009年から青森市、八戸市、五所川原市、むつ市で行って来ました。今回は初の弘前市で開催となりましたが、弘前市周辺地区の高校生56名に加えて小学生47名が受講しました。

午前の部は小学校6年生が対象です。糸結びの練習に続いて、医学生に先導されながら4つの模擬手術を順に体験しました。術衣を纏い、電気・超音波メスを実際に使用して豚・鳥肉を相手に

「手術」をしました。スーチャリングコーナーでは、術者と助手に分かれて閉腹操作を体験しました。腹腔鏡手術の鉗子操作体験も予想以上に

様になっていました。最初は緊張した表情が見受けられましたが、閉会式の頃には、皆、疲れも感じさせない元気な笑顔が見られました。弘前大学医学部の紋章の入った修了証書の授与、そして自動縫合器を使う際の合言葉「ファイヤー」の掛け声でセミナーは終了となりました。

午後の部は高校生が対象です。小学生版に加えて計7つの模擬手術を体験しました。腹腔鏡手術シミュレーターコーナーでは、執刀医とスコピストに分かれて胆嚢摘出術を体験してもらいました。「医学生、研修医でも少し難しいかな？」と思う課題でも、器用に達成する子供たちの能力には毎回

驚かされます。三時間半を超えるセミナーは終始活気あふれる雰囲気のまま終了となりました。アンケートを見ると、高校生の参加動機は、「医療職の興味」であったり「医学部受験への自己確認」であったり様々です。「普段は絶対に体験できない貴重な内容だった」「予想以上に皆さん明るいし楽しかった」「絶対に弘前大学医学部に入学します」という意見が非常に多く、セミナーの開催目的は達成されているものと考えています。また「医学生と話ができて有意義だった」という意見も多く、医学生が参加することにも大きな意義のあるセミナーだと強く感じます。

研修医を含む医師37名、医学生22名、医療機器企業からの協力者を含めると総勢80名を超えるスタッフがボランティアとして参加しました。佐藤学長、藤病院長にも参加していただき、貴重なお話を頂戴しました。県・市教育委員会をはじめ、多くの方のご協力があったり成り立っているセミナーだとあらためて感じております。この場をお借りして感謝申し上げます。

(消化器外科 講師 和嶋直紀)

弘前ねぶたまつり



津軽地方の伝統行事「弘前ねぶたまつり」が8月1日から7日間行われました。弘前大学のねぶたも大学と地域住民との交流を図ることを目的として、1日、5日、6日の3日間参加し、昭和39年に初参加以来、連続50年の出陣を果たしました。

1日には、附属病院外来診療棟正面駐車場において、小児科に入院中の子供達や保護者、医師、看護師、事務職員等による「小型ねぶた」が運行されました。本学はやしサークル「弘前大学囃子組」等による太鼓と笛の音にあわせ

て、子供達は「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ、津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。

また、病院内では、外来待合ホールにミニねぶたが飾られ、来院された方々にも好評でした。

(総務課)

車椅子寄贈

本院は平成25年6月21日、黒石市在住の田澤隆さんより、車椅子1台の寄贈を受けました。

田澤さんは5年前心臓発作のため黒石病院に搬送され、その後本院に転院し治療を受けられました。「2つの病院の緊密な連携により命を救っていただき、治療後5年間無事経過したことに対する感謝を形として表したい」と、黒石病院及び本院への車椅子の寄附を思い立ったとの事です。

田澤さんと本院の間を取り持っていた黒石病院事務局次長小林さんも同席のうえ、病院長室にて寄贈式が行われたのち、同室にて5年前のエピソードを改めてうかがうなど和やかに懇談

しました。病院長からは「患者さん用の車椅子は混雑しているときに足りなくなることもあり、ご寄贈いただけるのは大変ありがたいです。」と感謝の言葉が述べられました。田澤さんからご寄贈いただいた車椅子には寄贈記念プレートを掲示し、外来待合ホールにて来院される患者さんにご利用いただいております。

(医事課)

インシデントレポート奨励賞を受賞して



この度は思いがけず、このような賞を頂きありがとうございます。

正直に申し上げますと初めに受賞の連絡を頂いた際は、困惑の気持ちが強かったです。なぜなら、我々薬剤部では基本理念の一つとして、「患者さんに安全で、適正な薬物療法への貢献」を掲げており、抗がん剤のような治療域と毒性域が近接したハイリスク薬剤の投与量や投与日程のチェックは、薬剤師としての当然の責務であると思っていたからです。しかし、表彰式の際に受賞の要因が医療安全における相互支援のツールであ

るツーチャレンジールを実践したことによるものであること、そのツーチャレンジールがどのようなものであるかを説明して頂き、納得がいききました。私は、ツーチャレンジールのことをこの時に初めて知ったのですが、一度連絡を取って相手に伝えたいことがうまく伝わらなかった場合、もう一回は連絡をとるようにすることだそうです。確かに私自身、日々の業務の中で、一度の連絡では言葉不足になってしまい、うまく相手に伝えられなかったと感じることはしばしばあります。そのような場合には、一度連絡したしもういいかな、となるのではなく、やはりお互いが納得できるよう話し合うことが重要なのだと感じました。

今回学んだツーチャレンジールを実践していくのはもちろんのこと、薬剤師としての研鑽を積み、少しでも患者さんや皆様のお役に立てるよう精進していきたいと思っております。

(薬剤部 中川潤一)

七夕飾り・納涼祭り

【七夕飾り】

7月2日から7日まで、正面玄関の一角に七夕の笹を用意しました。患者さんをはじめ、笹の前を通る方々に思い思いの願い事を込めた短冊を飾っていただきました。用意した短冊が足りなくなり、何度も補充したところ、たくさんの方が願い事が笹に飾られました。また、より高いところに飾ろうと、背伸びしながら枝をたぐり寄せている子供の姿が印象的でした。

皆さんの願い事が叶いますように…。

【納涼祭り】

7月30日、病院正面玄関横で納涼祭りを開催しました。入院中の患者さんに、ご家族やお友だちと一緒に「宵宮」のような雰囲気を味わってほしいと思い、今年もヨーヨーつり、スーパーボールすくい、的あて、輪投げ、千本つりなどを準備しました。

蒸し暑い時間帯にもかかわらず、多くの患者さんたちが集まってくれたので、とても賑やかに開催することができました。ヨーヨーつりやスーパーボールすくい



では、大人も童心に返って大いに楽しんでいました。両手にいっぱい景品を持って喜んでいる患者さんたちの姿に、スタッフの方も元気をもらいました。

運営に協賛してくださった団体や企業、また、準備・運営・後片付けに協力してくださったスタッフの皆さんには、この場を借りてお礼申し上げます。(医事課)

ペーパーレス会議システム導入

弘前大学医学部附属病院では、院内諸会議のペーパーレス化を促進し、事務の効率化及び経費削減を図るため、「ペーパーレス会議システム」を導入しました。

このシステムは、米アップル社のiPad端末を利用し、1台のMac PCから最大32台のiPadにネットワークを使用せずUSBメモリ接続により資料の一斉送信が可能であり、これにより情報漏洩などのリスクも事前に回避できるなど、セキュリティ面での強化も図られています。

また、専用のタブレットPC管理カートを使用することで、iPadの管理・保管及び充電作業の効率化を実現することができ、今後、ペーパーレス会議システム



を活用することで紙資源のエコ化にも繋がり、さらには会議担当者の業務負担軽減やコピー代の縮減での費用対効果により、経費抑制への期待も高まっています。

なお、7月に開催された病院科長会及び病院業務連絡会では、会



議の進行にも特に支障がなく、出席者からは概ね好評を得られました。(総務課)

【編集後記】

南塘だより第71号をお届けします。原稿をお寄せいただきました皆様ありがとうございます。昔は、ねぶたが終われば秋風が吹く、と言われていたものですが、ここ数年はお盆を過ぎても暑い日が続くようになってきているようです。震災後、節電の夏というスローガンを目にすることもあり、暑さ対策をして過ごすようになりましたが、どうしてもエアコンに慣れてしまった身体には厳しく感じられます。夏が暑いほど紅葉は美しく、冬は厳しいと言われていますが、今年はどうなるのでしょうか？皆様も、季節の変わり目に体調など崩されませんように、ご自愛下さい。(病院広報委員 N.S.)